

上三川 近代化の歩み

明治維新から戦前まで

税制の近代化と租税制度改革

欧米諸国に追いつくために、急速な近代化を進めた明治新政府は、次々と新たな政策を打ち出しますが、これらの改革につきものなのが財源の確保でした。江戸時代までは年貢が一般的であり、検地を行い田畑から作り出される米などから、一定の割合を税として徴収していました。しかし、米の価格変動によって、税収が変動することから、財源が安定しないといった弱点がありました。

そこで、政府は各土地の生産量をもとに地価を算出し、この地価の3%を税金とし、土地所有者に課税しました(地租)。しかし、地価の算出に当たっては、過去の年貢等による税収をもとに算出し目標額として設定し、国は各府県へ割り当て、各府県は町村へ、そして各町村は各戸へと割り当てたことから、結果として国が税収



土地の所有者には写真のような地券が交付されましたが、登記法の成立とともにやがて廃止されました

を強制的に押し付けたことになり、人々が高い税を負担することとなりました。この地価の決定をめぐって、農民と地方長官の間で激しい争いが起こりました。この後、変動が認められていた地価は多くの反対により固定されたものの、日清戦争・日露戦争等の度重なる軍備拡張のため、地租率は改定され、日露戦争後には5・5%にまで上がってしまいました。

この地租改正は、税制改革の側面のほかに、江戸時代には認められなかった土地の個人所有を前提としていたことから、それまで不明瞭だった土地の所有権を確定するために、上三川の地でも測量などの多くの調査が実施されました。しかしこれにからんで、土地所有権の認定・測量の公平性を求める住民からの届出が残されていることから、相当な混乱があったことが伺えます。

地租は酒税などとともに、明治から大正時代にかけて税収の根幹となり、近代化を支えました。しかし、地価や地租率を改正しない限り、税収の増加が見込めないなど、経済成長とは連動しないことから、第一次世界大戦後は、所得税などが税金の主役となります。

志報川柳

岡島秀宝選

- | | | |
|------------------|-----|-------|
| カーナビも時には嘘をつきたがる | 上蒲生 | 菅原妙子 |
| 雑草の伸びが泣かせる老いの腰 | 大町 | 大八木トク |
| 咳一つしても家族にいたわられる | 石田 | 稲葉チイ |
| 覆面の片言置いて盗つてゆく | 上町 | 上野広江 |
| ちぐはぐな返事がかえる遠い耳 | 上蒲生 | 渡辺文子 |
| 手がかかる分癒やされる熱帯魚 | 三村 | 上野久美子 |
| こんなにもスーツまぶしい孫二十才 | 石田 | 大塚ナカ |
| 十八へもう成人の業者来る | 石田 | 高橋世津 |
| 花を見る人を見ている八重桜 | 上蒲生 | 鶴見敏子 |
| 我が輩はねずみをとらぬ血統書 | 石田 | 前原秀雄 |